

# AiGG

ほっかいどう

198

〔ほっかいどう 愛護〕発行／2024年 1月 発行所／札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7 4F TEL. (011) 271-0228  
発行者／北海道知的障がい福祉協会 会長 大垣 勲男



共栄

共栄

共栄

鶴が丘学園



にまくさ学園開園30周年

2024.01  
CONTENTS

- 2P. 年頭所感
- 3P. 北海道知的障がい者芸術祭みんなあーと2023を振り返って
- 4P. 研修報告 令和5年度災害対策研修会
- 5P. 研修報告 令和5年度幹部職員研修会
- 6P. 人気No.1 うちのメニュー
- 7P. ご長寿バンザイ
- 8P. 本の紹介  
手しごと探検隊「縫製品 サポートステーション・ステップ」

# 年頭所感 今こそ、北の実践力を示そう!

一般社団法人北海道知的障がい福祉協会 会長 大垣 勲男

1月1日に発生しました令和6年能登半島地震において尊い命を亡くされた方に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された方に心よりお見舞いを申し上げます。

また、この度緊急支援物資募集等にご協力いただきました会員の皆さまのご厚情に深く感謝申し上げます。

昨年を振り返りますと、新型コロナウイルス感染症が第5類に移行したことにより、当協会の事業であるみんなあーとや全道パークゴルフ大会、各種研修会も集合型で開催できましたことを大変嬉しく思っています。また、私たちの同胞であり先達である栗山ゆりの会の寺尾孝士氏が愛護福祉賞を受賞されたこと、旭川ねむのき会の古山慶一氏が北海道知事表彰（北海道善行賞）を受賞されたことは、北海道の障がい福祉にとって誉れであり大変嬉しい出来事の一つでした。

一方、昨年は会員事業所における虐待事案の報告が多い一年でもありました。会員事業所で虐待事案が発生した場合に、速やかに協会に報告し、協会は必要があれば再発防止と課題解決に向けた支援体制を組むための会員準則を3月に制定いたしました。昨年の4月から12月までに10件の虐待事案の報告が協会にありましたが、そのうちの9件が入所施設で、1件が通所系生活介護事業所での発生でした。昨年11月に当協会の権利擁護委員会が、虐待から身を守るための利用者向けパンフレットを作成し、各事業所における利用者向け研修会の開催を推奨いたしました。今後も協会としては、虐待撲滅に向けて一層力を入れて行く所存です。

さて、障害者総合支援法における施行3年を目途とした法改正が目前となりました。2022年8月に実施された障害者権利条約に基づく国連障害者権利委員会の第1回対日審査結果の総括所見が、想像以上に日本の障害福祉の方向と改変速度に影響を与えたと受け止めています。この度の法改正は理念や建前に留まることなく、脱施設化にむけて大きく舵を切ったといえます。特に障害者権利条約第19条の「自立した生活及び地域社会への包容」に係る勧告を受けて、令和6年度から意思決定責任者の配置、全ての入所施設利用者の地域移行に関する意向確認の義務付け（事業指定基準とし行政指導の対象化）、入所施設利用者の施設外の日中活動系サービスの利用意向確認の義務化、意向確認担当職員の配置義務化、意向確認マニュアルの制定（6・7年度は努力義務、8年度から策定義務化）、施設入所支援と生活介護事業の定員を10名刻みとした報酬単位の設定、前年度に地域移行した者のうち、6カ月以上地域生活を継続している者が1名以上おり、かつ入所定員を1名以上減らした実績を評価する加算の新設等々、地域移行と入所定員の縮小化に向けた法改正案を次々と打ち出してきました。一方で入所施設への期待として、その担う役割と機能に関して整理するための検討会を設けることを表明しています。もちろん、これらの法改正は入所施設だけの問題には留まりません。入所施設からの地域移行は、受け皿となる地域住居、通所系日中活動、居宅介護や相談支援等連帯して取り組まなければなりません。

北海道は全国で最も入所施設の利用者数が多く、直近（R5. 12月国保連発表）の数字で8,986人となっており、その約83%が道協会会員事業所の入所施設を利用しています。前述した脱施設化のうねりが始まる中、運営法人、事業所、そして事業管理者は、我が国が目指す共生社会の実現と利用者本人の意向に沿った暮らしの実現にブレることなく英断し、中・長期計画に着手していただきたいと思えます。国は国連障害者権利委員会の次回の対日審査である2028年2月までに、どこまで進めることができるかと相当に意識していると思われま。利用者の意向確認後の受け皿の充実と整備に向け、私たちは実践で示すとともに、英知を絞り具体的な法改正の提案をしていかなければならないと考えています。次年度からの3年間は本当に重要な期間となりますので、会員の皆様のご理解とご協力をお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

# 北海道知的障がい者芸術祭みんなあーと2023を振り返って

みんなあーと2023実行委員 (ハローENJOY助歩栗山) 犬養 雅博

令和5年9月14日～16日、21回目となる北海道知的障がい者芸術祭みんなあーと2023を開催しました。

今年度は実行委員4名で展示部門、ステージ部門を担うこととなりました。我々4名は開催に向けて、事務局も交えて毎日のように連絡を取り合って小会議を重ねました。より良い表現の場を作るために試行錯誤しながら意見を出し合い「みんなあーと」を作り上げていったことは、私たち実行委員の財産となり、深い絆を築けたと思います。

展示部門は昨年より多い354点の応募がありました。開催10日前、次々と搬入される作品を審査員の方が見やすいように慎重に丁寧に並べました。審査後は入賞や入選、選外に分けて、かえる2.7の4階の搬入会場から1階の保管場所に運びます。なかなかの体力勝負で作業が終わる夕方には足が棒になっていました。また、開催前日には審査員の指示の下、作品がより映えるように会場に展示しました。多くの作品の管理は骨が折れましたが、その分あーと作品を間近で見ることができて感動しました。会期中は、「どうやって作っているの?」「感性が素晴らしい」など観覧者から直接感想をいただきました。また入選者が自身の作品を笑顔で鑑賞している姿を見て、運営の疲れも吹き飛びました。

ステージ部門も前回より多い10チームが参加しました。ステージ監督2年目の私は台本作成と当日のスタッフの動きに頭を悩ませました。ステージは緞帳が下りている間が大忙しで、道具を事前に決めた位置に配置し、参加チームを誘導、司会者がチーム紹介を終えるまで、これを2～3分で行わなくてはなりません。常に台本とにらめっこしながら、時間通りに進むかははらしていました。間に合わずに緞帳を上げる合図を遅くした事もありましたが、ステージ担当スタッフの皆さんの的確な動きにより進行に大きく影響することなく無事終了することができました。

ステージの横断幕は利用者みなさんが笑顔で手を振る写真を貼り合わせて、道東知的障がい福祉協会みなさんが作成してくださいました。カラフルな横断幕がステージを更に輝かせたことは言うまでもありません。道東地方会の皆様に深く感謝申し上げます。

最後に、みんなあーとの派遣に協力頂いた皆様、実行委員として至らぬ点も多々あったと思いますが、無事に成功できたことは皆様のおかげです。改めてお礼申し上げます。

展示部門、ステージ部門に参加して下さったみなさんの真剣な顔、輝く顔、キラキラした笑顔、清々しい顔、一人ひとりの表情が強く胸に残っています。ありがとうございました！



# 研修報告 令和5年度災害対策研修会報告

危機管理対策委員会 副委員長（雪の聖母園 施設長） 高島 康典

令和5年9月28日に「令和5年度 災害対策研修会」を開催しました。令和元年9月に開催して以降、新型コロナの影響からなかなか実施が出来ず、実に4年ぶりの開催となりました。

委員会の開催もなかなか対面で行うことが出来ない中、オンラインを活用しながら委員会を開催し、内容について議論を重ねてきました。令和6年度よりBCP策定が義務化されるため、「BCP策定」の研修は盛り込む必要があるだろう、久しぶりの開催であるため実際に被災した事業所の「生の声」をもう一度届けたいなど、各委員の様々な想いがありました。今回の研修会は、これらの想いを短い研修日程の中でどう具体化するかという難しさを感じながら、一日の日程の中に、被災体験、BCP策定指導、防災資器材の体験、全部を詰め込んだ「何でもあり研修会」になったのかなと感じています。

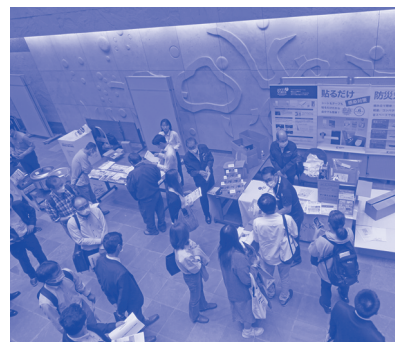
開会にあたり佐藤副会長にご挨拶をいただき、社会福祉法人清水旭山学園 旭山農志塾施設長 今滝貴行氏に「水害とブラックアウト、そして暴風災害を経験して学んだこと及び今後の課題」と題して講演をいただきました。実際に被災しないと気付かないことや同じ道内に住んでいても知らなかった被害の様子などを示していただき、自分の事業所は大丈夫、ではない！ということを改めて気づかせていただきました。

BCP策定については、北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課 課長補佐 名久井浩氏に行政説明をいただきました。策定の際に躓きそうな部分について、わかりやすく丁寧に説明をいただき、BCP策定に背中を押していただけたのではないのでしょうか。

研修会最後の枠では、令和4年9月から12月にかけて行った災害対策状況調査の概要と結果について報告、協会および協力法人が北海道と協定を結び派遣登録を行っているDWAT（災害派遣福祉チーム）における北海道防災訓練の様子や研修内容、避難生活での大切な視点や備えについて話しました。その後、会場を移し簡易ベッドやパーティションの設営体験、簡易トイレや段ボールベッド、炊き出し用の器具など専門業者による展示をご覧くださいました。

「何でもあり研修」であるため、副題を決めることが難しく、安直に「備えあれば憂いなし」とさせていただきましたが、この研修会で得られた情報や知識、体験が参加者皆様の事業所において、いつやってくるかわからない災害への「備え」となってくれることを願います。

最後になりましたが、講師の皆様、ご参加の皆様、開催に際してご協力いただきました各事業所、協会事務局、出展業者の皆様には厚く御礼申し上げます。



# 研修報告 令和5年度幹部職員研修会

## 講演「自閉症の人たちに関わってきて」

ハローENJOY札幌Ⅱ施設長 寺尾孝士 氏

私は学生時代のボランティア活動で自閉症の子供たちに出会い、その後おしま学園に就職することになりました。当時は環境によって自閉症児が生まれるという考えが主流で、全面受容と行動療法が療育の中心でした。

東京では養護学校を卒業した子供たちの行き場がなく、軽度の知的障がい児と自閉症児の暮らしの場として第二おしま学園は開設されました。その後成人期自閉症を対象とした星が丘寮を開設することになり、第二おしま学園から利用者が移動しました。新たに入所してくる自閉症児は激しい行動障害を示す事例が多く、苦慮していたところTEACHプログラムに出会い、佐々木正美先生による研修会やノースカロライナでのトレーニングセミナーに参加するなどして利用者個々にあった構造化に取り組むことになりました。

入所施設を利用している人たちの多くは身辺処理ができず、自傷他害で要求を伝えるという状況で、誤った学習が積み重なった結果、成人期までに必要である基本的なことが身につけていない状態でした。

そのころ母親が子供を殺して自分も死ぬという無理心中事件が絶えなく、こういう悲劇を起こさないために、「強度行動障害を中核とする支援困難な人々への支援についての研究」を旭川荘、侑愛会、弘済学園の連携で実施しました。その研究で分かったことは、自閉症と診断されている人に行動障害が多いのは、必要な時期に必要な教育が提供されていない、自閉症について理解されていない、知覚過敏・コミュニケーションへの配慮がなされていない等児童期に適切な教育を受けていないからであるという事でした。

理解しやすく、見通しのつく構造化された環境は信頼感と安心感を育てるための重要な前提です。幼児期から高齢期まで適切な方法で一貫性と継続性のある包括的な支援や一人ひとりのニーズに対応した暮らしの拠点づくりが必要ではないかと思えます。幹部である皆さんには彼らの人生をハッピーにしてほしい、それができるのは福祉の現場にいる皆さんだと思います。



## 鼎談「昭和から平成、そして令和へー今つなぐ支援への想い」

光増昌久氏(小樽手をつなぐ育成会会長)・小林繁市氏(北海道知的障がい福祉協会理事・伊達市手をつなぐ育成会会長)・橋文也氏(北海道知的障がい福祉協会・日本知的障害者福祉協会顧問)が登壇しました。

光増氏からは、「当事者の権利擁護の推進、実践について、また国連障害者権利委員会による日本への勧告の内容、インクルージョン、父権主義脱却等について」、小林氏からは「昭和は収容保護隔離思想の時代で、施設幸福論の考え方が養護学校義務化、障害基礎年金制度等の導入により、権利擁護等への機運が高まった。平成は地域へ移行する時代であり、グループホーム制度の誕生が施設からの地域移行と地域生活継続の肝となった」、橋氏は、「我々は運動家であった。仲間である光増氏、小林氏の功績は現在にわたり大きい。また、いろいろな賢人、哲人等に影響を受けた」とそれぞれお話しくださいました。

国連勧告を受けてのグループホームに関する意見を求めたところ、光増氏からは「入所施設と同じような形態。一人暮らし、結婚を目指すことを支援側が意識すること。」、橋氏は「数値目標のためではなく、本人の意思をもとに体制を作るべき。」、小林氏は「本人の意思の尊重、自己決定。本人が望む生活だと思う」とそれぞれ回答をいただきました。最後に橋氏より「人権侵害ゼロへの誓いは権利擁護の幅が広すぎるので、虐待ゼロの誓いに変更を望む、『北歩塾パートⅡ』を企画し若い職場に啓発して欲しい」という話で鼎談は終了しました。



(研修での講演・鼎談を抜粋して編集しました。)

人気  
ナンバー  
No.1

# うちのメニュー

## 「北海道の夏は野外でジンギスカン！」

社会福祉法人北海道光生舎 エルム・ソーイング 管理栄養士 石川 友香梨

光生舎ではエルム・ソーイングのほかに近隣にある施設の皆さん190名が一堂に集まり、毎月1回会食行事として楽しんで参加できるような食事を提供しています。

その中でも人気なのは、直径60cmもある大きな鍋を使用して行う真夏のジンギスカンで、皆さんで鍋を囲みながら楽しい時間を過ごしています。ジンギスカン以外にも夏が旬のホタテや焼き鳥、ホルモンなども炭火で焼いてサイドメニューとして食べてもらいながら、夕暮れの野外で生ビールやジュースを片手に作業の疲れを癒しています。

みなさんからは「おいしい!」「おなか一杯食べたよ。」という声が挙がり、暑い時期でもたくさん召し上がっていただき、夏バテを解消しています。

利用者みなさんに楽しんで食べてもらえるよう、色々なメニューを凝らし、食事提供を行っていききたいと思います。



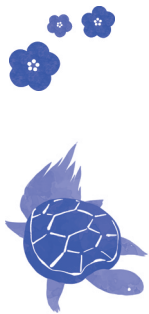
## 「希望の詰まったクリスマスメニュー」

社会福祉法人柏の里めむろ 障がい福祉サービス事業所オークル 栄養士 森井 愛里

オークルでは当事業所の職員と委託業者の職員、利用者代表が参加する給食会議を毎月行っています。その会議に利用者代表として参加するのは自治会「なかよし会」の会長です。会長が会議の前に給食の感想や、次月の献立に取り入れてほしいものなどを他の利用者から聞き取り、会議の場で代表して発表してもらっています。利用者が主体となって活動できる、アットホームな温かい事業所です。要望箱や、誕生月のリクエストメニューの取り組みも行っており、希望に合わせて好きな給食が食べられるのは利用者の楽しみの一つとなっています。

写真は過去のもですが、なかよし会行事「クリスマス会」に合わせて皆さんに食べたいものを事前にアンケートを取り、それらを盛り合わせたクリスマスメニューを提供しました。かなりのボリュームになってしまいましたが、おいしいものはたくさん食べられるようで皆さん笑顔で召し上がっていました。好きなもの、美味しいものを食べているときの顔はとても生き生きとし、輝いていて、見ているこちらまで笑顔になってしまいます。「おいしかったよ!」の声を聞くと、また頑張ろうと思えます。これからも、普段の食事も行事食も、みなさんが「笑顔」になれるような環境と食事を提供していきたいです。





# ご長寿バンザイ



全道各地のご長寿さんのほっこりな毎日をお届けします。  
うちの「ご長寿さん」を紹介したい!という方、ご応募おまちしています。

## お寿司とうなぎで元気ハツラツ!

### サポートセンター心愛

お寿司とうなぎが大好き。菅原拓(ひろく)さん(84歳)を紹介します。

菅原さんは現在、登別の生活介護事業所サポートセンター心愛に通っています。月曜日から金曜日までの5日間を休むことなく利用しており、とても元気に活動を行っています。

日中活動としては、下請けの軽作業をしたり、ぬり絵活動を行ったりしています。軽作業は細かい作業でもミスなくゆっくりと行っています。ぬり絵は配色を考えながら色鉛筆を使って綺麗に塗り、完成した時には「出来たよ」と笑顔で報告してくれます。

レクリエーションや行事にも積極的に参加し、近郊の観光地へドライブに出掛けたり、アイスを食べたりと楽しんでいます。コロナ前のカラオケレクでは、美声を披露していました。十八番は細川たかしの『矢切の渡し』と北島三郎の『函館の女』です。

好きな食べ物は、前述のお寿司とうなぎのほか、ラーメンや赤飯も大好きです。飲み物はオロナミンCなどの栄養ドリンクが好きで、元気ハツラツです!

グループホームで生活しており、スタッフとコミュニケーションを取りながら、日々楽しく過ごしています。掃除当番としても日課の玄関掃除を毎日頑張ってくれています。

これからも病気や怪我には気を付けながら元気に楽しく充実した人生を送ってほしいと思います。



## にこにこ穏やか 癒やし系

### 共同生活援助くるみ寮

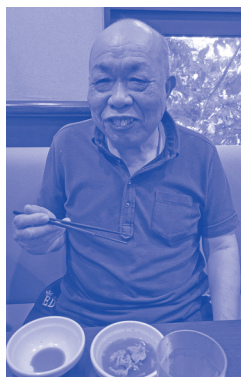
共同生活援助くるみ寮は、札幌市厚別区で計16カ所のグループホームを運営する事業所です。今回はそんなグループホームの1つで生活されている伊藤彰二さん(74歳)をご紹介します。

伊藤さんは福岡県で生まれ、北海道に来てからは伊達市のホテルやパン工場で長く勤めていました。ご病気を機に退職し、平成23年からくるみ寮を利用しています。現在はグループホームで共同生活をしながら、日中は就労継続支援B型事業所のホープスに通い、銅線の被覆剥がしやポスティングのお仕事をしています。風邪を引いたりする事もなく毎日元気に出勤し、真面目にコツコツと作業に取り組んでいます。

性格はとても穏やかで優しく、怒ったところを誰も見た事が無いくらいです。いつもニコニコとしているので、ホームでは癒しの存在となっています。

美味しいものを食べたり温泉に入る事が大好きで、今年はコロナによる外出制限も緩和されたので、久しぶりにホームの仲間としゃぶしゃぶを食べに行ったり、のんびりと温泉に浸かりに出掛け、美味しいご飯を堪能しました。最近も「次はいつ温泉に行けるかな? また行きたいな~」とお話していました。

これからも毎日ニコニコで穏やかな伊藤さんでいられるよう、ご本人に寄り添いながら見守っていききたいと思います。





# 本の紹介

モノが少ないと快適に働ける：  
書類の山から解放される  
ミニマリズム的整理術

著者：土橋正

出版社：東洋経済新報社

ISBN-13：978-4492045220



この本を読んで原稿を書いているのは年末なので、どうやら片付けをしたい気分ようです。片付けや断捨離をしたほうが気持ちよく年越しできると思いませんか？日々片付けをしているはずなのだが、知らず知らず物が溜まっていく（特に紙物がひどい）。脳内なら知識量が増えて嬉しいが、紙物が増えるのは、もうそろそろ終わりにしたい。すべての紙物をシュレッダーに掛けてしまえば良いのだが、それでは困るので整理術をアップデートすべきと考える。

作者は冒頭で「ミニマリズム」を「快適最小限」と表現している。このフレーズは納得感が高い。何冊かミニマリストや断捨離本を読んだが、ここまで腑に落ちる表現は初めてだ。

それと子どもの頃にロボットアニメを見た世代にじっくりくる、「デスクの cockpit 化」という表現だ。必要なものがノールックで手に届く機能的な机上に憧れませんか？私自身はそこを目指したい。職場の机上は隣の同僚よりかは、シンプルに機能的になっていると思うが、作者も書中に記しているあるときの取材で、「写真で見ると見事にきたない」とある。実際に私自身も写真を撮ってみた。「見事にきたない」。作者は取材後のさらにまとまった作者の仕事場の写真を書中に掲載している。それを見るとモデルルームのようだ。あの物量で仕事になるのかと感心させられる。

もう一つ感心したフレーズがある。スケジュール管理の話でスケジュールの空白を『人と約束がないという予定がある』というフレーズだ。私のスケジュールは空白だらけなのだ。『約束がないという予定』とは思っても見なかった。空白が予定なのだから、日々予定で一杯となる。少し息苦しい感じにも思えるが、ここに心の余裕が生まれ、何かを生み出せる時間になるとおもって空白も有意義になる。

原稿を早く書き上げて、年末の大掃除もしなければならぬのだが、スケジュールの空白に「大掃除」と書く気持ちには、まだなれない。

(K)



## 手しごと探検隊！

### サポートステーション・ステップ 「縫製品」

社会福祉法人北海道光生会サポートステーション・ステップでは、利用者の方が取り組むアート活動で生まれたキャラクターを、事業所内生産活動で縫製班が製造しているトートバッグ等に印刷し、オリジナル商品として販売しています。縫製品としては、トートバッグの他にクッション、完全防水生地でのノンスリップを使用した介護用BOXシーツやベッドパット等も製造しています。最近では、車椅子用バックやウロバック、介護ベッド用柵カバー（打撲防止用）等、お客さまからのご相談に可能な限り手づくりで製造し、お届けしています。

道の駅「ハウスサルビ奈井江」にある  
店舗「みみずく」他で販売中です。



製造・販売：社会福祉法人北海道光生会 サポートステーション・ステップ  
住所：〒072-0026 美幌市西3条南2丁目1-12  
TEL:0126-66-1133/FAX:0126-66-1120  
MAIL:ssstep@lapis.plala.or.jp



## 編集会議

先日『月』という題名の映画を見に行きました。「津久井やまゆり園」の事件を題材にした映画でなんとも考えさせられる重い内容の映画でした。自分の中でうまく消化できず、それを見た著名人のコメントを見てみました。その中に自分の考え方に近い岩井志麻子氏（作家）のコメントに目がとまりました。内容は以下の通りです。

「きれいごとの何が悪い。事実の追求や真実の究明より、きれいごとのいかに事実や真実に近づけられるか、そこに懸命になるのが生きることであり、そのきれいごとを信じられるのが人間である。」

そうだと心の中で叫んでしまいました。我々の仕事は利用者の方々の「しあわせ」というきれいごとを追求・究明することです。これからも職場の仲間とそこを目指していきたいと思います。最近はコロナ等を理由に職員と膝を割って、話をする事も少なくなっています。虐待事案の話や権利擁護の話が出る度に、改めて職員同士でお互いの思いを伝える場面を設けなければと強く感じています。

重い気持ち、決意を持ちながら夕食につき、そして、ほっかいどうAIGO197号の編集会議の「魚肉ソーセージの天ぷら」の記事を読み直しながら、そう言えば、小さい頃我が家は「シチュー」を「カレーライス」のご飯付きで食べていたなあと思い出していました。このことを友人に話した時、馬鹿にされたことを懐かしく思いながら、一人でにやつき、少しだけ心が軽くなりました。

(広報編集委員 佐藤 浩樹)